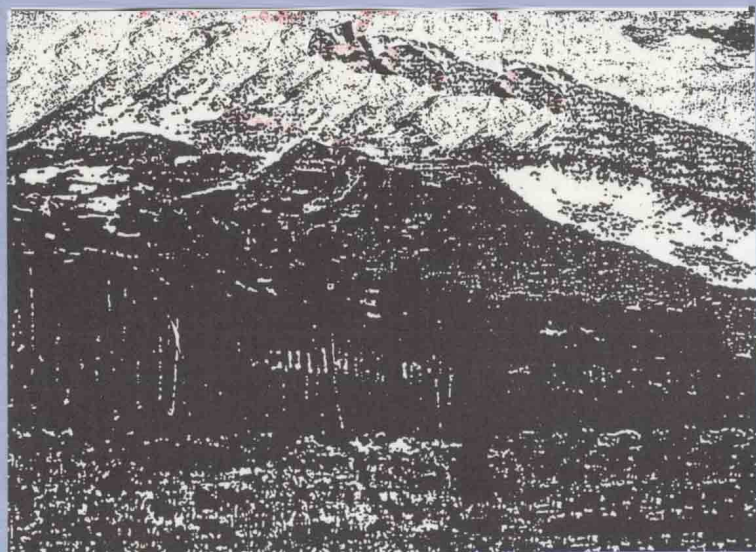
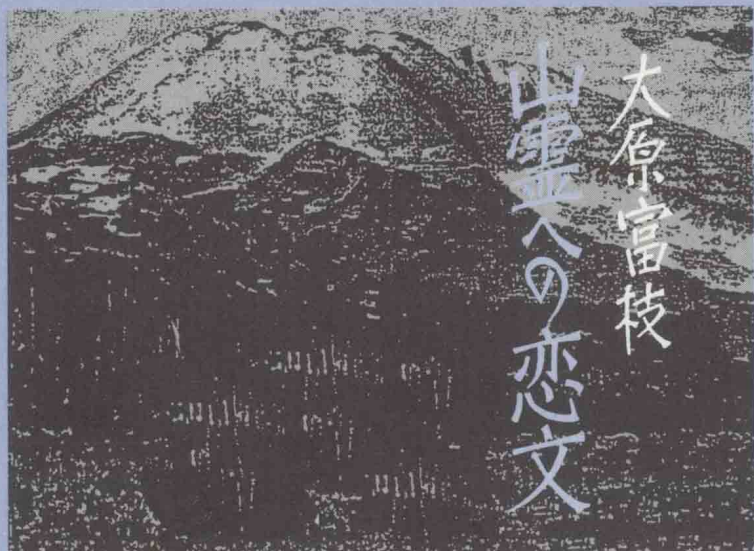


大原富枝

山霊への恋文



福武書店



大原富枝（おはら とみえ）
 一九一二年、高知県長岡郡吉野村に生まれる。高知女子師範を結核を病み中退。三八年、「祝出征」が芥川賞候補となり作家生活にはいる。五七年、「ストマイつんぼ」で第八回女流文学者賞を、六〇年、「純という女」で第一四回毎日出版文化賞と第一三回野間文芸賞を受賞する。著書として他に「建礼門院右京大夫」「アブラハムの暮舎」「地鎮」「地上を旅する者」「ペンガルの憂愁」などがある。

山霊への恋文

一九八七年一〇月九日 第一刷印刷
 一九八七年一〇月二五日 第一刷発行

定価一四〇〇円

著者 大原富枝

発行者 福武總一郎

発行者 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二―三―二八
 〒三三三電話〇三―二二〇―二二一
 振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

山
靈
へ
の
恋
文
目
次

命	187
蟻の列	155
古代裂	113
仙人掌	71
白いきのこ道	49
山霊への恋文	7

装丁
田村義也

山
靈
へ
の
恋
文

山靈への恋文

一

その朝、ホテルの部屋のテレビにスイッチを入れると、見なれた山容が画面いっぱいに映り、その頂上に白いものがうっすらとおりていた。例年よりずっと早い初冠雪だということだった。そうか。とうとう雪が来たか！

老衰がきわまって後脚がすっかり力を失ってしまった三郎が、やっと身体をひきずるように歩いて行く姿が私の眼の底にある。犬の名に、三郎はおかしい、漢字なのがおかしい、と人がよく笑ったが、私はかまわずにずっとそう呼んで、十七年間いっしょに暮してきた。

タクシーを山の家の前で下りると寒気が足もとからはいあがってきてたちまち全身に沁みだした。陽は明るく照っていたが、風があつてそのなかに白いものがときどき舞っている。門をあけると林のなかの小径に、落葉と枯枝が一面に散っていた。下草は霜に打たれてみんな倒れ伏し、樹々

はその根方まであらわにしている。私は林の奥まで踏みこんでいった。朝鮮五味子が真赤に熟して珊瑚細工のように垂れ、まむし草の異様な実が赤く熟して黒い粒々の種子をのぞかせている。

夏の日に華やいだ美しさを見せていたしも、つけ草もいまは実って倒れ伏し、わすれな草や延齡草は跡形もない。そして三郎はどこにもいなかった。落葉松や樺やみずきの、ここぞと思う大木の根方にも、彼の赤い首輪は見つけられなかった。

——草が枯れてしまったところ、探しに來ます。どうしても納得ゆかないから……

私が言うと、数十年もここに住んで、官有林の伐採夫として生きてきた老いた仙人が、そんなことするもんじゃねえだに。山の神さまのなさったことだよ。

強い調子でたしなめられた。それを思い出しながら、冬枯れの林のなかに立ちつくしていた。それでも私は山靈に訊ねたいのであった。

（三郎は、どこに眠っているのでしょうか。どうぞ教えてください。）

身体が震えるほど冷え通ってしまったので、鍵をとり出して家の中にはいった。玄関の大戸だけあけ、家中の電燈をつけて、電気ごたつを入れた。熱い紅茶にたっぷり砂糖を入れて飲み、やっと人心地づいたところで、仕事部屋と寝室のある別棟へあがってゆく。渡り廊下の雨戸をあけるのは私の力では無理なので、外側から庭を廻ってゆく。その道を、三郎がよたよたと辛うじて歩いていた姿を思い出す。寝室にはいつて電燈をつけ、じっと仕事部屋や、ベッドや、用簞笥な

どを眺める。元気なころの三郎は、私のベッドの脚もとに眠っていたものだった。離室の階段をのぼれなくなったのは昨年の夏からであった。

一昨年の晩秋、三郎は、東京の家で最初の脳内出血の発作をおこした。その日は穏かな小春日和で、庭の日溜りに敷いた藁の上に座ぶとんを重ねて、三郎は眠っていた。ガス会社の人がちょっとした工事をしていて忙しく、気がつくとも陽が落ち、急に冷えこんでいた。三郎を家の中へ連れてやらなくてはと出てみると、紅葉した満天星つつじの棚の下に妙な姿勢でうずくまっていた。私を見あげる眼差が心細げで、途方に暮れているようであった。立ちあがろうとするのだが、後脚が痙^こきつけるようで伸びず、よろめいて尻餅をつく。なにかの異変が自分に起ったことを彼もわかっている。しかし何故なのかわからないのだ。

ここ一年ほど明らかに老衰していたので、この初冬の夕べの、手の指もかじかむような冷えこみがこたえたにちがいない。十二、三キロはある彼の後脚を持ちあげてやり、家の中に入れた。熱い湯で脚を拭いてやり、温めてやると、やがて関節もののび、食事として、快よさそうに眠りこんだ彼を安心して眺め、仕事部屋のある二階にあがってきた私は、机の前に坐ったとき、ふと思つた。

(三郎が二階へあがれなくなったのは、あれはいつからだったろう?)

脳内出血の最初の発作が起ったのは、多分その夜の明け方の、一番気温のさがった時刻であつ

たろう。その朝、彼はべたっと頭を床につけて臥ていた。左側を下にしている。声をかけても身じろぎさえしない。傍に坐つて覗きこんでみたが、彼は、まったくのところ頭があらないのであった。かかりつけの獣医は電話口で即座にいった。

脳内出血ですね。おそらく失明していると思いますよ。

私は思わず少しむきになって答えた。

いえ、眼は見えています。

そんなことないがなあ。とにかく午後一番に往診します。

やがて往診の獣医は、居間の入口で三郎の様子を注意深く眺めただけで、短く宣言した。

まちがいありません。

ヒリリヤはすっかり快くなっていますね。心臓もしっかりしています。大丈夫ですよ。

さっと聴診器をはずし、三郎の臉をおしひろげながら小さい懷中電燈をさしつけて覗いた。

ふーん。左はだめですが、右の方は助かっていますね。反応します。左脳をやられましたね。

そうですか。左の眼、癒りませんかでしょうか。

すぐるように私は訊いていた。

獣医は考えてちよつと黙った。

十五歳ですからねえ、手術なんてことはやめましょう。徐々に回復はします。内臓は悪くない

し、心臓がしっかりしていますから。

注射を二本、一本は静脈であったが、されるままになって声も立てない。

くるべきものが来た、と私も覚悟はした。十五年間、唯一の家族として、私を支えてくれた。近年は、犬などと思えないほど気持の通い合うようになっていた彼は、病むにもまた、人間そっくりであった。

仕事場を階下に移し、私はいつも視角の中に彼の病床を入れていた。まるで声帯を失ってしまったように、うんともすんともいわず、左側の頭を床につけて三郎はひっそりと臥ている。私はときどき毛布を重ねた上に敷いてあるタオルを見に行った。タオルと毛布の間にはビニールを二枚重ねて挟んである。牛乳と、牛乳に浸したパンをほんの少量しか食べようとはしない彼は、タオルを汚すことも少なかった。

三日目の夕方であった。低いが、まぎれもなくわん、と一声三郎は啼いた。

あ、声でした！

夕食の支度で台所にいた家政婦さんと私は、同時に低く叫ぶように言った。口笛を吹きたいような気分であった。彼は回復期にはいったのだ。——娘のころ、胸の病気で長い療養生活を送ったことのある私は、この回復期という言葉に、生理の底から湧いてくるような親愛をいまもおぼえる。寒波襲来で破れた彼の脳の毛細血管がやっと癒えはじめたのだ。声を出しても傷口に響か

なくなったのにちがいない。

明日はまたもっと元気になろうね。

牛乳を飲むとき、少し頭をあげられるようになった彼に、私はたくさんの言葉をかけてはげました。翌朝、目が覚めると期待いっぱいでも階下へ下りて行った。

ドアを開けるなり、悲鳴に近い叫びが私の口から洩れた。三郎がいない。座ぶとんが空っぽだ。狼狽しながら眼で探すと、いた、いた。昨日まで身動きもできなかった彼が、広い部屋の反対側の隅まで移動していた。そこで妙に不自然な姿勢でうずくまっている。壁際のガラス戸棚の前に据えてある大きな白磁の壺を押し倒し、半ば壺の上に乗りあげるような形にうずくまり、座礁した船のように動けなくなっている。そのうえ、そこまでの移動の道すじに、なんと汚物が点々と落ちていたのであった。

汚物を踏まないように注意しながら拾い歩いて、やっと座礁した彼を抱きおろした。いったい昨夜の何時ごろからこんな姿勢を堪えていたのであろうか。失明した左眼からはおびただしい膿が流れでて、溶岩のように鼻の上で固まり、なんとも哀れな顔ではあった。何から手をつけばいいのか茫然としたが、まず熱いタオルで顔を拭いてやり、身体を清潔にしてやった。途方に暮れていたらしく、あきらかに助かったという表情になっている。

まあそれにしても、身動きできなかった彼が、とにかく自力でここまで移動できたのだ。十メ